

# 2009年度 一般入学試験(前期) B方式

英語・数学・化学・国語

問題冊子

(2月27日)

## 【注意事項】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 学科別の出題科目および選択方法は下表のとおりです、間違いのないよう十分注意してください。

学科名	出題科目	選択方法
薬学科 薬科学科 動物生命薬科学科	英語 数学 化学	左の3科目のうち1科目を選択し、解答してください。
危機管理システム学科 動物・環境システム学科 医療危機管理学科	英語 数学 化学 国語	左の4科目のうち1科目を選択し、解答してください。

3. 出題科目のページは下表のとおりです。

科目名	該当するページ
英語	P. 2 ~ P. 5
数学	P. 6 ~ P. 7
化学	P. 8 ~ P. 11
国語	P. 12 ~ P. 17

4. 解答冊子は切り取らずに、使用してください。
5. 試験開始の合図があったら、各解答用紙に受験地、受験番号を記入し、解答を始めてください。
6. 問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
7. 答案用紙全てを回収します。
8. 試験終了後、問題冊子および残った解答冊子は持ち帰ってください。

## 二 次の文章を読み、後の設問に答えよ。

石に花咲く

このことわざは「実際には起り得ないことのとえ」とふつう説明されている。「土」の上でなら「花」は育つけれど、「石」の上となると根を下ろすこともできない。「石」と「花」は、まったく異質なものだ。接点がない。だから石に花を咲かせることなど不可能だ。ゆえに「A」と解釈されてきた。しかしそういう理解は正しいのか、と私はいつからか疑問に思うようになってきた。「石」と「花」はまったく異質なのか。まったく接点がないのか。もし、少しでも接点があるとしたら、そういう理解は正しいとは言えなくなる。事実、苔などは、「石」の上でも「花」を咲かせることがあるのではないか。

- 1 だからどうだと言うわけではない。
- 2 近代の科学観に立って、中世にできたことわざがおかしいじゃないか、などと陳腐なことを言うとしていないわけではない。
- 3 教科書的に言えば、長い何十億年という時間軸を取れば、最初は無機物（石）であったものに、だんだん有機物（花）が育ってきたということは、「常識」にすらなっている。
- 4 理屈を言えば、「進化論」を学んだ世代にとっては、無機物（石）から生命（花）が生まれたということを教わってきたのではなかったか。
- 5 ことわざに「進化論」をぶつけようと言うわけではない。

私はじつは「石に花」ということわざを、たくさんあることわざのなかでも、とりわけ根幹的なものと考えてきた。なぜなのか。このことわざには、ことわざの総体を考えるうえで<sup>(1)</sup>根本的に大事なイメージが含まれていると私は感じてきたからだ。その根幹的なところを最初に説明してみたい。

ここで言う「石」とは、誰もがわかるとおり「固いもの」のことだ。反対に「花」とは「軟らかいもの」のことだ。この「固いもの」に「軟らかいもの」は「交じらない」。これがこのことわざのイメージの基本にある。基本はそうなのだが、ことわざの実際のイメージは「石に花」となっているのだから、単に「固いもの」と「軟らかいもの」というのではなく、「物としての固いもの」と「命としての軟らかいもの」というイメージの対比になっている。そこでことわざ辞典は軒並み、そうした物と命は「交じらない」と考えた。しかしこのことわざで使われる「石」のイメージは、じつはたいへん豊かなイメージを含んでいることに私はある時、気がついた。それは、

B

雨だれ石をうがつ

の「石」のイメージを考えていたときのことだ。こうしたことわざで言われている「石」とは、確かに「固いもの」のことだが、単に「固いもの」というのではなく、「固く」閉じているある種の仕組みのことだということがわかってきたからだ。そのとき、目から鱗<sup>うろこ</sup>が落ちるようにことわざの全体像が見えてきた。つまり「石」とは、それ自体で「固く閉じられたシステム」をイメージし、よそのシステムを受けつけないことを表している。そして逆に「花」は「開かれた軟らかいシステム」を表している。と

ところが、システムである限り、まったく他のシステムを受けつけないということはあり得ない。どんなシステムにも、どこかに他のシステムと交じることのできる部分がある。

たとえば昔の人々にとって何よりもたいへんだったのは、Aという村に暮らす者と、Bという村に暮らす者が交わらなくてはならない状況に置かれたときである。たとえばBに住む者がAの村に入ってしまったとしてみる。Aという共同体の風習、習慣は手堅く、よそ者を受けつけない。そのとき、AはBにとつて、まるで「石」のような堅さを持っているように見えるのである。

しかしBの人はがんばってみた。必死でAに取り入れてもらえるようにがんばってみた。そこで「B」<sup>(1)</sup>「B」<sup>(2)</sup>、冷たい石の上でも三年すりわりつづければ暖まる、だからたとえつらくとも辛抱しなさい、いつかきつと報われる日が来る、と。

こうしてBはAに根を下ろした。まさに「C」<sup>(3)</sup>「C」<sup>(4)</sup>となった。「石」のように固いものの上にも、いつか「花」の咲くこともある。

このように、慣れ親しんできた生活のシステムから、まったく未知な別の生活のシステムに入ってしまうときは、相手のシステムは、最初はどうしてもなじめない「石」のような「固いシステム」として感じられる。しかし「冷たく固いシステム」も「三年」辛抱したら、「暖かいなじめるシステム」になってくることもある。「雨だれ石をうがつ」の、「石」と「雨だれ」の関係も同じだ。

#### 石に針

石に灸きりゅう

これらのことわざも、表向きは骨折り損というか、やっても無駄なことのたとえとして使われてきた。つまり異質な者同士の交わりのむずかしさだ。AがBに交わることは、まるで石に針を打つような、石に灸をするような、そんな無駄な骨折り損としてあるというわけだ。しかしこのことも、不可能に限りなく近いけれど、まったく不可能というわけでもない。だから、次のようなことわざもつくられてきた。

#### 石に立つ矢

石にかじりついても

ここで「石」のイメージにも、まさに石のように堅く閉ざして、自分を受け入れてくれないシステムがある。ここにはDがEになるイメージが語られている。「石に立つ矢」、各辞典はこれを「一心をこめて事を行えば、Dなことはないというたとえ」と注釈している。「石に花」はDのたとえで、「石に立つ矢」は「DがEになる」というのだ。なんともちぐはぐではないか。

(中略)

石に名を残す

転石苔を生ぜず

「石に名を残す」というのも『故事・俗信ことわざ大辞典』(小学館、以下『大辞典』と略)によれば「石碑などに名前を刻んで後世に残す。名が朽ちないでながく残ること」となっている。言うまでもなく、ここでの「石」というのは、あるFのことだ。一つのFの役に立ち、その人々の記憶にとどまること、その結果、石碑に名を刻んでもらえることができる。むろん、実際にそんなこ

とはまれであったのだろうが、ともかくそういうふうにして人々の心にとまるような働きをしたときにはじめて石に名を残すと言われてきた。つまり **F** の心に刻まれることがそのことわざの意味だったのだ。

「転石苔を生ぜず」。『大辞典』によると「活発に活動しているものはいつまでも古くならない」というたとえ。安定した位置に甘んじていると、いつのまにか古めかしく時代遅れになること」と説明されている。このことわざについて外山滋比古が興味深いことを書いていた。

「転石苔を生ぜず」ということわざがある。これは明らかに英語の

A rolling stone gathers no moss. (ア・ローリング・ストーン・ギャザズ・ノー・モス)

の訳である。英語の方はたいへん有名で、一カ所にながく腰を落ち着けていられないで、たえず商売変えをする人間には金がたまらない、という意味で使われる。ときには、これをひとひねりして、相手を次々と替えているような人間の恋愛は、いつまでたっても実を結ばない、というように転用されることもある。

このことわざは、イギリスで生まれたもので、このコケ(モス)とは、金のことなり、と権威ある辞書にも出ている程だ。(『ことわざの論理』三笠書房)

彼はそう説明しつつ、最近アメリカでは、このことわざが二つの異なる解釈をされていることを指摘している。つまりあるアメリカ人たちは「優秀な人間は席のあたたまるひまもなく動きまわる。Aの会社へ行ったかと思うと、スカウトされてまた別のBの企業へ引き抜かれる。こういう人はいつもピカピカ輝いている。コケのようなものが付着するひまがない」と。そして彼は前者のような解釈が、

「**G**」を基準とするイギリス系文化圏のアメリカ人によってなされ、後者の解釈が、

「**H**」を常とするアメリカ系文化圏のアメリカ人によってなされていることを指摘するのである。そしてしめくくりとして『君が代』に歌われる、

さざれ石の巖となりて苔の生すまで

を紹介して、古い日本の感覚では「苔の生す」までを「良し」としているが、現代のアメリカ感覚の若い日本人たちは、それを「良し」とは感じていないかもしれないと指摘していた。

彼の指摘はそのとおりだと私も思う。彼のセンスの良さが、こういうことわざの目のつけどころによく現れている。しかしそれでも私の物足りなさを言わせてもらえば、彼ですら、なぜこのことわざが「転石」という「石」なのかを問う視点を出していないということだ。「ローリング・ストーンズ」と言えば、あの有名なロックミュージックの旗手を思い浮かべる人はたくさんいるだろう。ローリング・ストーン、転がる石、なぜ転がる石なのか。なぜ石が転がるのか。日常生活のなかで、そんな転がる石を見た人がいるだろうか。そういうことを問うていけば、「転石」などというイメージ自体、あまり身近なものではないことに気がつく。しかし、このことわざでイメージされているのが「石」であるところがミソなのだ。人を受けつけない固い石Ⅱ閉ざされたシステムⅡ若者一般が、街から街へと転がってゆく。それがおそらく「ローリング・ストーン」なのだろう。そこに、まわりを受け入れないままに、自分たちのシステムにかみ合うシステムだけを優先して生きてゆく生き方と、転がらずに留まって古くからの伝統や共同体に根を下ろすような生き方が出てくる。

どちらがどうだというわけではない。生き方はさまざまである。ことわざは、「定着」としての「石」と、「移動」としての「転石」を取り出すことで、人生のイメージの多様性をよくつかみだしていた。どちらの人生に自分の流儀を見出すかは、人それぞれであるが。

こういうふうに見れば、昔の人々が「石ころ」一つにでも、深いイメージを託すことができていたことが見えてくる。そしてそういうふうなことわざを見る見方を、今まで私たちはだれからも教わらなかったのだ。そういう視点から改めて「石に花」を見てもらいたい。この短いことわざがなんと意味深くできていることかわかるはずである。この「石」の考察ひとつだけでも十分に、

I

ことができるだろう。

(村瀬 学『ことわざの力』より 一部表記を改めた)

問一、空欄 A を補うのに最も適当なものを、文中より抜き出して記せ。

問二、文中の1～5の文章を、文意が通るように並べ替え、その順番を番号で記せ。

問三、傍線(1)の「根本的に大事なイメージ」とはどのような「イメージ」か、説明しなさい。

問四、空欄 B を補うのに最も適当なことわざを記せ。

問五、空欄 C を補うのに最も適当なことわざを文中より抜き出して記せ。

問六、傍線(2)の「石」と「雨だれ」の関係について説明せよ。

問七、空欄 D、E を補うのに最も適当な語を、それぞれ記せ。

問八、空欄 F を補うのに最も適当な語を、文中より抜き出し漢字三文字で記せ。

問九、空欄 G、H を補うのに最も適当な語を、文中より抜き出しそれぞれ漢字二文字で記せ。

問十、空欄 I を補うのに最も適当なものを、次のア～オより選び、記号で記せ。

ア 石に花咲く

イ 百聞は一見にしかずという

ウ 朱に交われば赤くなる

エ 他山の石とする

オ 石に名を残す